発掘調査報告28集

馬住ヶ原工業団地造成事業緊急発掘調査報告

辻　沢　南　遺　跡

（第２次調査）

1989. 3

駒ケ根市土地開発公社
駒ケ根市教育委員会

発掘調査報告28集

馬住ヶ原工業団地造成事業緊急発掘調査報告

辻　沢　南　遺　跡

（第２次調査）

1989. 3

駒ケ根市土地開発公社
駒ケ根市教育委員会

例　　言

1　この報告書は馬住ヶ原工業団地造成事業に伴うもので、駒ケ根市土地開発公社の委託を受けて実施したものである。

2　本報告書は契約期間内にまとめることが要求されているため、調査によって検出された遺構・遺物を主体とし、資料の再検討は後日の機会にゆだねることとした。

3　遺構番号は、1次調査からの連番としてある。

4　本報告書の実測・製図はすべて気賀沢進があたった。焼土はドットで表し、正位の埋甕はウメと表示してある。縮尺は各図に示してある。石器実測図中の—•—は礫表皮面の存在を意味している。

5　写真撮影・編集はすべて気賀沢があたった。

6　本報告書の執筆・編集は気賀沢が行い、友野良一が監修した。

7　本報告書は、本文・図・図版と分けて編集してある。

8　遺物及び実測図等調査に伴う関係資料は、駒ケ根市立博物館に保管してある。

目　　次

例　言

目　次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯……1

第Ⅱ章　遺跡の環境

第1節　遺跡の位置及び地形・地質……2

第2節　歴史的環境……3

第Ⅲ章　発掘調査

第1節　概要……4

第2節　時期区分について……4

第3節　住居址と遺物……4

第4節　土壙と遺物……8

第Ⅳ章　おわりに……9

図　目　次

第1図　辻沢南遺跡位置図……10

第2図　辻沢南遺跡地形図……11

第3図　辻沢南遺跡と周辺の遺跡……12

第4図　辻沢南遺跡遺構概略図（折り込み）……13

第5図　第2次調査遺構全測図（折り込み）……15

第6図　第101号住居址実測図……17

第7図　第102号住居址実測図……17

第8図　第103号住居址実測図……18

第９図　第104号住居址実測図 …… 18
第10図　第105号住居址実測図 …… 19
第11図　第106号住居址実測図 …… 19
第12図　第107号住居址実測図 …… 20
第13図　土壙実測図 …… 21
第14図　第101号住居址出土遺物 …… 22
第15図　第102号住居址出土遺物 …… 23
第16図　第103号住居址出土遺物 …… 24
第17図　第104号住居址出土遺物 …… 25
第18図　第105号住居址出土遺物 …… 25
第19図　第106号住居址出土遺物 …… 26
第20図　第106号住居址出土遺物 …… 27
第21図　第107号住居址出土遺物 …… 27
第22図　土壙出土遺物 …… 28

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景
図版２　第１号・２号住居址
図版３　第３号・４号住居址
図版４　第５号・７号住居址
図版５　第６号住居址
図版６　土器・土偶
図版７　石器

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

辻沢南遺跡は一部西側を除いて、昭和61年度に約６箇月にわたる発掘調査（第１次）が行われ縄文時代中期後葉の住居址100軒と土壙300余基が確認されている。

昭和63年度になって、工場進出が本決まりとなり、未発掘部分の発掘調査が必要となったため、市開発公社の委託を受けて、駒ケ根市埋蔵文化財発掘調査会が実施することとした。

昭和63年12月末に発掘区設定及び準備を行い、平成元年１月17日より２月２日まで発掘調査を行い、その後、整理・報告書刊行と３月末にて事業を終了した。

○駒ケ根市埋蔵文化財発掘調査会

顧　問　小平善信（駒ケ根市文化財保存会長）
〃　中山敬及（駒ケ根市教育委員長）
会　長　木下　衛（駒ケ根市教育長）
理　事　福沢　亘（駒ケ根市教育次長）
〃　友野良一（駒ケ根市文化財審議会委員長）
〃　松村義也（　〃　〃　副委員長）
〃　新井徳博（　〃　〃　委員）
〃　竹村　進（　〃　〃　〃）
〃　林　　赳（　〃　〃　〃）
〃　吉江修深（　〃　〃　〃）
〃　下村幸雄（駒ケ根市立博物館長）
監　事　下平基雄（駒ケ根市収入役）
〃　北沢晋六（駒ケ根市郷土研究会長）
幹　事　気賀沢喜則（駒ケ根市教育委員会次長補佐・社会教育係長）
〃　滝沢修身　（　〃　社会教育係主査）
〃　気賀沢進（駒ケ根市立博物館主査）
〃　白沢由美（　〃　嘱託）

○辻沢南遺跡発掘調査団

団　長　友野良一（日本考古学協会員）（発掘担当者）
調査主任　気賀沢進（　〃　）（　〃　）
調査員　木下平八郎（長野県考古学会員）
〃　北沢雄喜（上伊那考古学会員）
〃　小町谷元（　〃　）
〃　吉沢文夫（　〃　）

（50音順）

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置及び地形・地質（第１・２図）

辻沢南遺跡は，駒ケ根市赤穂福岡馬住ケ原（赤穂14番地代）に所在し，JR飯田線福岡駅の南西方向約１Kmの段丘上に位置する。南側には中田切川が東流して飯島町との境をなしている。標高は680～690ｍである。

伊那谷は長野県の南部にあり，東には赤石山脈，中央構造線をはさんで戸倉山・高鳥谷山を初めとする前山の伊那山脈が並行して走る。西には木曽山脈があり，天竜川をはさんで南北に並走する。

伊那盆地は，この高峻な両側の山地からの過剰堆積により山麓に大小いくつもの扇状地が形成され，山麓から流れ出た中小の河川が直交して天竜川に注ぎ田切地形を造っていることは有名である。

駒ケ根市赤穂地区は，市の境界となっている北の大田切川，南の中田切川によって形成された複合扇状地からなり，小河川による田切地形が顕著な所である。辻沢南遺跡はこのような小河川の一つ辻沢川の南岸にあり，南には中田切川が流れ赤穂地区の最南端にあたる。天竜川から数えて３段目の段丘突端部に位置し，比高差は15ｍ前後を測る。

南を流れる中田切川との比高は45～50ｍ，北の辻沢川とは15ｍ前後である。辻沢川は，当遺跡付近にてＶ字谷を形成して中田切川に注ぐが，現在では源流もわからないほどの小河川である。中田切川との距離は上流は狭くなり当遺跡はこの両河川にはさまれた三角形の台地となっている。

辻沢川の沿岸は工場や宅地で往古の姿はなくなったとはいえ，今でも雑木林や湿地帯がみられ市内でも数少ない原始相の残る地域といえよう。

遺跡地は東に向かって５～６°の傾斜を示している。当遺跡は伊那礫層を基盤とし、その上に２～３ｍの厚さに新期ローム層（Ⅲ層・御岳第四軽石層）が覆っている。漸移層（Ⅱ層）は10～15cmで表土（１層）は40～50cmを測る。

調査地一帯は畑地で、西側は山林、東側は南側では山林が台地突端まで続く。１次調査部分の北側大半は現在グランドとなっている。

第2節　歴史的環境（第3図）

赤穂地区は小河川に沿った台地上に数多くの遺跡が分布しているが多くはここ近年のほ場整備事業によって消滅しており，残された遺跡は数えるほどとなっており，今後十分な保存を図る必要がある。

辻沢川沿岸は，多くの遺跡が知られ，総称して辻沢遺跡群と称している。これらの遺跡群については，地元の研究団体「辻沢遺跡群研究会」が詳細な調査を行うとともに，保護を行っている。

段丘下は旧三州街道の通っていた所で多くの石仏も残されており，交通の要所となっていた所である。この沿線上には経塚が2基（2・13）あったことが確認されているが現在は残っていない。段丘下にある馬住の原遺跡（3）は住宅建設に伴い辻沢遺跡群研究会の手によって調査がなされ，縄文時代中期井戸尻最末から曽利期にかけての住居址2軒が確認されている。

辻沢川をへだてた北側には，川頭（4－縄文中期・後期），辻沢丸山（5－縄文早期・中期・晩期），辻沢北（6－縄文早期・中期・晩期・弥生），辻沢原（7－縄文中期）がある。辻沢丸山・辻沢北遺跡よりは押型文土器も採集されており注目される。

辻沢川が中田切川に注ぐ地点には筒沢遺跡（8）があり，縄文中期の土器とともに晩期の遺物が採取されている。

辻沢遺跡群の周辺にも多くの遺跡がみられる。山麓に位置する養命酒工場用地内遺跡からは，押型文土器を始め，早期から前期初頭の土器や縄文時代中期・平安時代の住居址さらに水神平系土器が調査によって発見されている。扇央部には大徳原遺跡（24－縄文中期・弥生），大原北遺跡（25－縄文中期），大原南遺跡（26－縄文中期・平安）がある。当遺跡と同一段丘面にある駒ケ根工業高校遺跡（27）からは縄文時代中期の土器が出土している。この北側の十二天遺跡（28）は縄文時代後期の上伊那の標識遺跡となっており注目される。現在は原野となっている。

これらの遺跡の北側には，上穂沢川が流れ，その流域にも多くの遺跡があり，発掘調査が行われている。14は舟山遺跡で縄文時代早期の小竪穴群が検出されている。その西にある羽場下遺跡（16）は縄文前期末の住居址4軒が確認されている。その西側には，縄文時代中期の大城林遺跡（18），藤助畑遺跡（16），八幡原遺跡（17），北方遺跡（19），南原遺跡（21），横前新田遺跡（22）がある。大城林遺跡は弥生時代中期の木棺墓が確認されており注目される。

10の荒神沢遺跡と12の如来寺遺跡は縄文時代晩期の遺跡で荒神沢遺跡からは発掘によって，住居址とともに多くの土壙群が晩期末の土器とともに出土している。

荒神沢遺跡の東段丘突端には丸塚古墳（10）があった。大正年代の開田によって壊され，直刀などが出土している。現在は石碑が残っている。

養命酒工場用地内遺跡一段高い段丘上の林道の切り通しからは，押型文を伴う小竪穴が確認されており非常に興味深いものがある。

第Ⅲ章　発掘調査

第１節　概要（第３・４図）

今回の発掘区域は、１次調査の西に続く畑と山林地帯である。１次調査において確認された集落の西の限界を見極めるため、畑の西側山ぎわと南側山林内に計５本のトレチを設定した。調査の結果、遺跡の拡がりは、造成されたグランドの西30m程の範囲と判明したので、グランド西の道路中心線に平行するようにグリットの南北方向を設定し、東西30m、南北76mの範囲を全面発掘した。

表土の排土には重機を用いた。調査区域は長いも栽培の折のトレンチャーの後が70～100cm間隔で南北方向に見られ、遺構を壊っている。

遺構の検出に当たっては、第Ⅱ層漸移層で行うよう極力努めた。住居址はすべて竪穴式で、第Ⅲ層ローム層を深く掘り込むが、土壙は全体に浅く第Ⅲ層をわずかに掘り込むのみである。

調査の結果は住居址７軒、土壙19基で、１次と併せると住居址は107軒となる。今回の調査によって、集落の西の限界が判明したこととなる。

第２節　時期区分について

今回の調査において出土した土器は第１次調査のものと変化がみられないので、以下に示す時期区分を今回も使用することとした。

第Ⅰ期　地文に縄文と条線文を持ち、沈線による横位の入組文と入組懸垂文の併用される一群と加曽利Ｅ式に類似する土器いわゆる下伊那第Ⅱ段階（米田編[※1]年を指す以下同じ）を主体とし唐草文土器が客体としてみられる時期である。

第Ⅱ期　隆帯による渦巻文を物唐草文土器（下伊那第Ⅲ段階）が主体となる時期で縄文地に入組文を施す前期の土器は少なくなり、加曽利Ｅ式類似土器が多くなる。加曽利Ｅ式類似土器は口縁部文様帯の渦巻文は幅広な半肉彫状となり胴部は沈線による懸垂文である。この時期後半に結節縄文がみられるようになる。この結節縄文土器の共伴の有無により、当期を新・旧の２区分に分類することとしたい。

第Ⅲ器・Ⅳ器　唐草文土器が消失し、結節縄文が主体を占める時期で、縄文を伴うものをⅢ器（下伊那第Ⅳ段階）、結節のみのものを第Ⅳ期（下伊那第Ⅴ段階）とした。

※１　米田明訓「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年」甲斐考古17－１，1980

第３節　住居址と遺物

遺　構（第６図）

１　第101号住居址（第６・14図．図版２）

本址は集落の南西限となるもので、北西に第102号住居址がある。

プランは東側がややふくらむ隅丸方形で4.7×4.7mを測る。主軸方向はN－87°－Wで東に入口がくる。掘り込みは西で50cm、東側やや浅く40cm前後となり、床面は全体に平担で良くタタキしめられており良好である。周溝は全周している。

炉は中央西寄りに位置し、炉石はすべて抜かれている。120×115cmを測る掘炬燵状石囲炉で、深さは40cm、焼土が10cmほど堆積している。

主柱穴は1．2．5．6の4本で入口施設の柱穴3．4がある。P_2とP_3の間の床面上には花崗岩の平らな自然石がすえられている。南壁ぎわ中央床面上には緑色岩の原石が置かれている。

遺　物（第14図）

遺物は少ない。1．2はP_1壁ぎわよりまとまって出土したものである。ともに大形の深鉢形土器である。辻沢南第Ⅱ旧期（以下○期のみとする。）に属する。

石器は打製石斧1点（12）のみで、あと打ち欠きを持つ緑色岩の原石1点がある。12の打製石斧は頭部を欠き、礫表皮面はみられない。硬砂岩製である。

2　第102号住居址（第7・15図　図版2・6）

遺　構（第7図）

第101号住居址の北西にあり北側には土壙群がある。

プランは東側が張り出した五角形プランで、4.8×5.3mを測る。主軸方向はN－82°－Wで入口は東側張り出し部分である。周溝が全周する。

掘り込みは30～35cmである。炉の東から壁に向かって120cm幅の凹みがみられ、他の床面より一段堅く通路と考えられる。同様な例は1次調査において1例、今回第106号住居址で確認されている。

炉は中央西寄りに位置し、掘炬燵状石囲炉で炉石はすべて残っている。東側を除く三方は、大きな割り石を縦長に組み、東側は小ぶりな細長い自然石を横長にすえ、焚口としている。深さは40cmで焼土が10cmほど堆積する。

主柱穴は1．2．3．5．6．の5本でP_4は支柱であろう。

床面上にはP_1の北、東壁P_6寄りと凹部中央に自然石がみられた。凹部中央自然石の南側床面より5cmほど浮いて台付鉢（15図－1）と小形深鉢（15図－3）、土偶（15図－4）が出土している。石器はP_6の北床面より凹石が出土している。

遺　物（第15図）

土器は少ない。1は台付鉢の坏部である。2は深鉢の胴下半部、3は小形の深鉢形土器で無文である。土偶（4）が1点出土している。頭部を欠くもので、該期特有の臀部の張り出すものである。住居址の所属時期はⅡ旧期に属する。

石器は覆土中より打製石斧3点と敲打器片1点、床面より打製石斧2点、磨製蛤刃石斧1点、凹石1点が出土している。

8．9は片面に礫表皮を残すものである。11は頭部に使用時の敲打痕が認められる。石質は8

は硬砂岩、9．10．11は緑色岩類、12は花崗片麻岩である。

3　第103号住居址（第8・16図　図版3・6）

遺　構（第8図）

本住居址は土壙群をはさんで第102号住居址の北東にあり、第104号住居址が近接している。

プランは南側が張り出すが基本的には楕円形を呈し、4.2×4.4mを測る。主軸方向はN－19°－Eと思われる。周溝はない。

壁高は西で30cm、東で10cmと浅くなる。床面は炉に向かってやや凹くなり、タタキはあまり顕著でない。

炉は中央北西寄りに位置し、小形の掘炬燵状石囲炉である。炉石は北西部を除き抜かれている。

主柱穴は4本である。炉を中心とし自然石が多くみられる。炉の手前床面上より深鉢形土器（第16図－1・2）が、また炉覆土中より土偶（第16図－6）が出土している。炉内より敲打器（第16図－16）と打製石斧（第16図－12）がやはり出土している。

遺　物（第16図）

土器は多く出土しているが完形に近くまとまるものはない。3は台付鉢の台部で孔がみられるが2孔と1孔である。6は土偶の胴部である。

住居址の所属時期はⅠ期からⅡ期の過度期であろう。

石器は図化した7点ですべて床面出土のものである。打製石斧の内,11を除き片面に礫表皮が残る。石質は10．11．12．14は硬砂岩、13．16は緑色岩類、15は蛇紋岩である。

4　第104号住居址（第9・17図　図版3）

遺　構（第9図）

本住居址は第103号住居址と第105号住居址の中間に位置する。

プランは楕円形で、3.3×3.6mの小形の住居址で主軸方向はN－43°－Wで南東部が入口である。周溝は南壁にみられる。

壁高は20cm前後と浅い。床面は固くタタキしめられ、東にやや傾斜している。炉はほぼ中央にあり、小形の掘炬燵状石囲炉で炉石はすべて抜かれている。主柱穴は4本である。

遺　物（第17図）

土器、石器とも少ない。土器はすべて破片で器形復元できるものはない。

住居址の所属時期はⅠ期であろう。

石期は図示した3点のみで、床面出土のものである。石質はすべて硬砂岩である。

5　第105号住居址（第10・18図　図版4）

遺　構（第10図）

当住居址は第104号住居址の北東にあり、東側は道路法面によって一部壊されている。第1次調

査の西限に接する位置にある。

プランは楕円形を呈し、東西推定4.9m、南北5.9mを測る。壁高は西で30cmを測るが東に行くに従い低くなり15cmほどである。主軸方向はN－70°－Wである。周溝は認められない。

床面は固く堅緻である。

炉は中央西寄りにあり掘炬燵状石囲炉で掘り込みは25cmと浅い。東側を除く三方は割石を縦長にすえている。東側焚口部は自然石を横長に２段にすえている。北西と南東コーナーには詰石が認められる。

主柱穴は４本である。

遺　物（第18図）

土器はすべて深鉢形土器の破片のみで、器形復元できるものはない。４～６は結節縄紋を持つものである。住居址の所属時期はⅡ新期に属するものであろう。

石器は床面から出土した３点のみである。９は石匙の破損品であろう。石質はすべて硬砂岩である。

６　第106号住居址（第11・19・20図　図版５・６）

遺　構（第11図）

本址は第105号住居址の北西に位置し、北には第107号住居址がある。北東部で土壙355号を切り、住居址の覆土中には土壙352，353，357号がある。

プランは東側がわずかにふくらむ隅丸方形で5.8×6.0mを測る。主軸方向はN－58°－Wであろう。壁高は西で40cm、東では30cmとやや低くなる。周溝は全周している。

床面は炉に向かって凹くなり、非常に固くタタキしめられている。当址も第102号住居址同様炉焚口部から入口部に向かって1.2～1.5m幅の凹みの通路が認められる。壁ぎわにはP_7，P_8の入口施設の柱穴が認められ、P_8寄りに胴下部を欠く正位の埋甕（第19図－１）がみられる。

炉は中央西寄りにあり、掘炬燵状石囲炉で炉石はすべて抜かれている。掘り込みは45cmで炉石の痕跡が明瞭に残されている。

主柱穴は１．３．６．９の４本である。Ｐ２は上部に配石を持っており土壙の可能性もある。P_2の西床面上に花崗岩の丸石がすえられている。

遺　物（第19・20図）

土器の出土は多いが埋甕（１）以外はすべて破片である。埋甕内部よりは何も出土していない。５．６は同一個体であろう。結節縄紋を持つものは９のみで混入と思われる。住居址の所属時期はⅡ旧期に属する。

石器は他の住居址と比較すれば多い。覆土中より打製石斧６点、敲打器・凹石各１点の計８点が、床面より打製石斧４点、磨製定角石斧２点、蛤刃石斧１点、大形粗製石匙と横刃形石器各１の計９点が出土している。図示しなかったものは覆土より出土の欠損品の打製石斧５点である。

石質は10，15，16，17は緑色岩類、20は花崗岩他は硬砂岩である。

7　第107号住居址（第12・21図　図版４）

本址は第106号住居址の北に位置している。プランは不整楕円形を呈し4.9×5.2mを測る。主軸方向はN－90°－Wである。周溝はみられない。

掘り込みは15～20cmと浅く壁の立ち上がりはゆるやかである。床面はタタキが明瞭でなく軟弱である。炉は中央西寄りにあり、炉石はすべて抜かれている。掘方は1.5×1.1mの楕円形を呈し掘り込みは20cmと浅い。これからすると石組炉の可能性が強い。炉の北西部にはピットがみられる。後出のものであろう。

主柱穴は１．３．４．５．６の５本である。

遺　物（第21図）

土器、石器ともに少ない。土器は結節縄紋を持つものが主体である。住居址の所属時期はⅢ期である。

石器は図示した打製石斧１点が床面より出土しているのみである。石質は硬砂岩である。

第４節　土壙と遺物（第13図・22図）

遺　構（第13図）

今回の調査で土壙は19基確認された。第102号住居址の北に11基が、第106号住居址の周辺及び覆土中に７基が密集する。351号のみ単独である。

第106号住居址覆土を掘り込んで、352．353．357号の３基があり、プランは不明である。355号は第106号住居址に切られている。

プランは平面形円形のもの（340．342．345．349．351．353．354．358）と楕円形のもの（341．343．344．346．347．348．350．355．356）とがある。357も円形を呈すであろう。

断面形態は皿状のもの（340～347．354．358）とタライ状のもの（348）、桶状のもの（349．351．356）の三形態に分けられる。

人為的な埋戻しが認められたものはない。344．358は内部に石がみられる。357は配石を伴うものである。

器形を復元できるもの（347）や多量に土器を伴う（343）土壙は２例のみで他はすべて細片の土器を出土したものである。

遺　物（第22図）

１は347号土壙より出土した小形深鉢形土器である。２～４は343号土壙より出土した大形の深鉢形土器で３．４は同一個体である。

石器は341号土壙より打製石斧（５）と石錘（６）が各１点、348号土壙より打製石斧（７）の３点が出土している。石質は５．７は硬砂岩、６は粘板岩である。

第Ⅳ章　おわりに

今回の調査によって明らかとなった遺構は、縄紋時代中期後葉の住居址７軒と土壙19基で、第１次調査と併せて住居址は107軒となった。

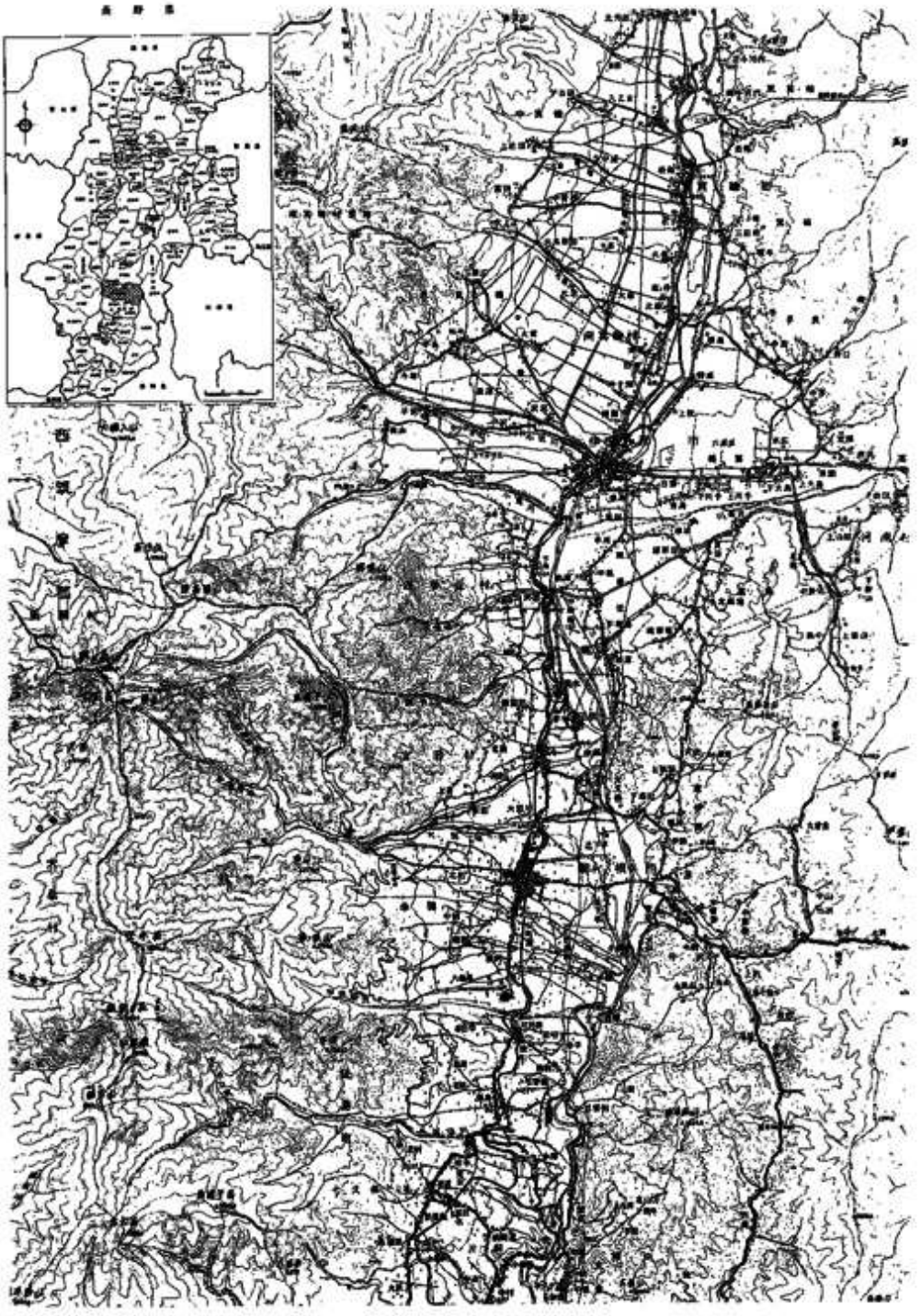
今回の調査においても、集落の発生が縄紋時代中期中葉まで逆のぼる資料は得られず、中期後葉に限定された大集落である。今回集落の西限が明らかとなったことは当遺跡の集落構造を考える上で重要なことである。

西側は住居址群が希薄となるが環状を呈しており、環状の小群が連続して全体に辻沢川に向かって開口部を持つ集落構成が伺われる。

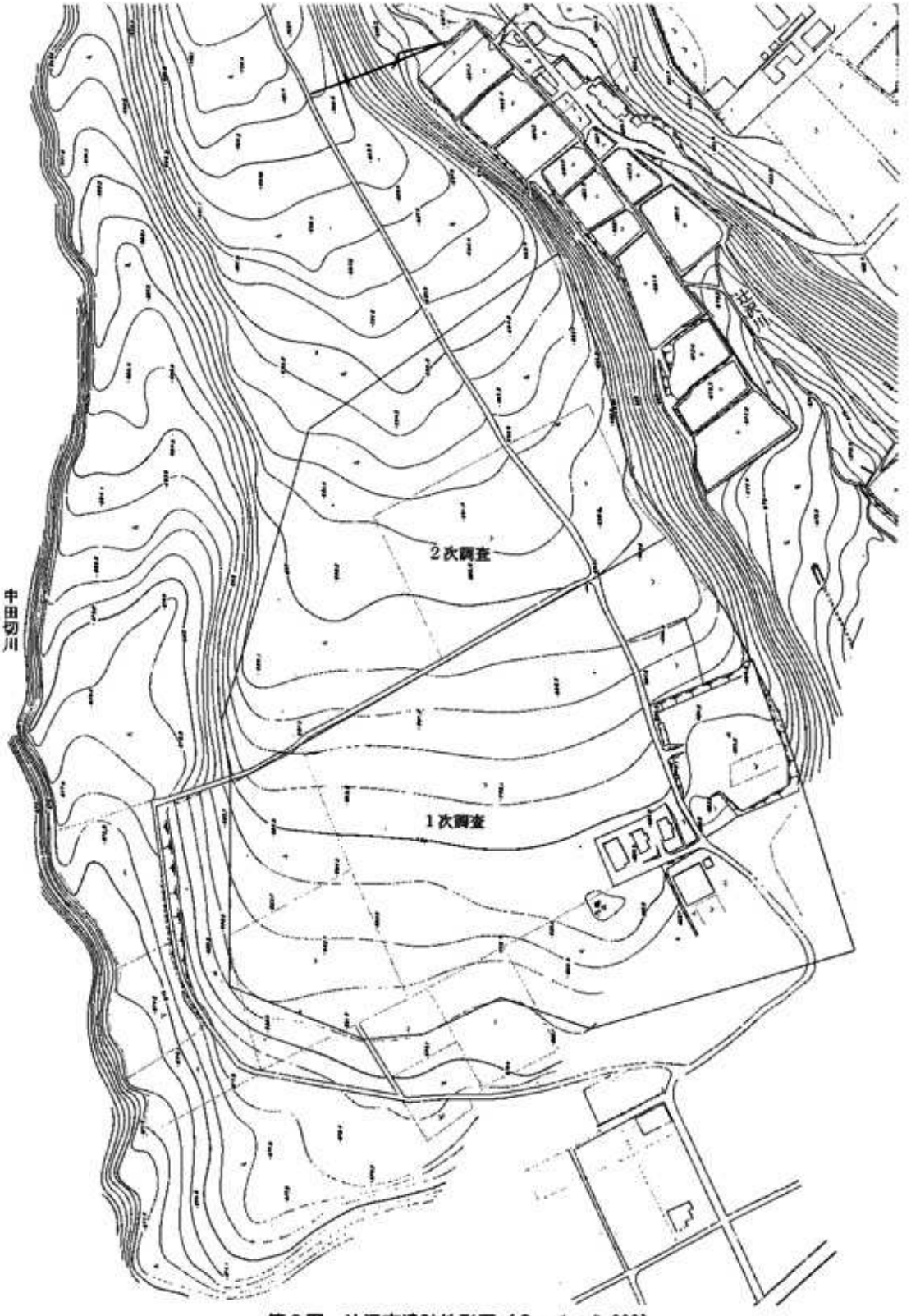
確認された７軒の集居址の時期は、Ⅰ期－104、Ⅰ～Ⅱ期－103、Ⅱ旧期－101．102．106、Ⅱ新期－105、Ⅲ期－107で、今回はⅣ期のものは確認されていない。炉を含む住居形態の在り方は特に変わることはない。

出土土器の細分とともに集落形態の変遷など今後の課題は多い。

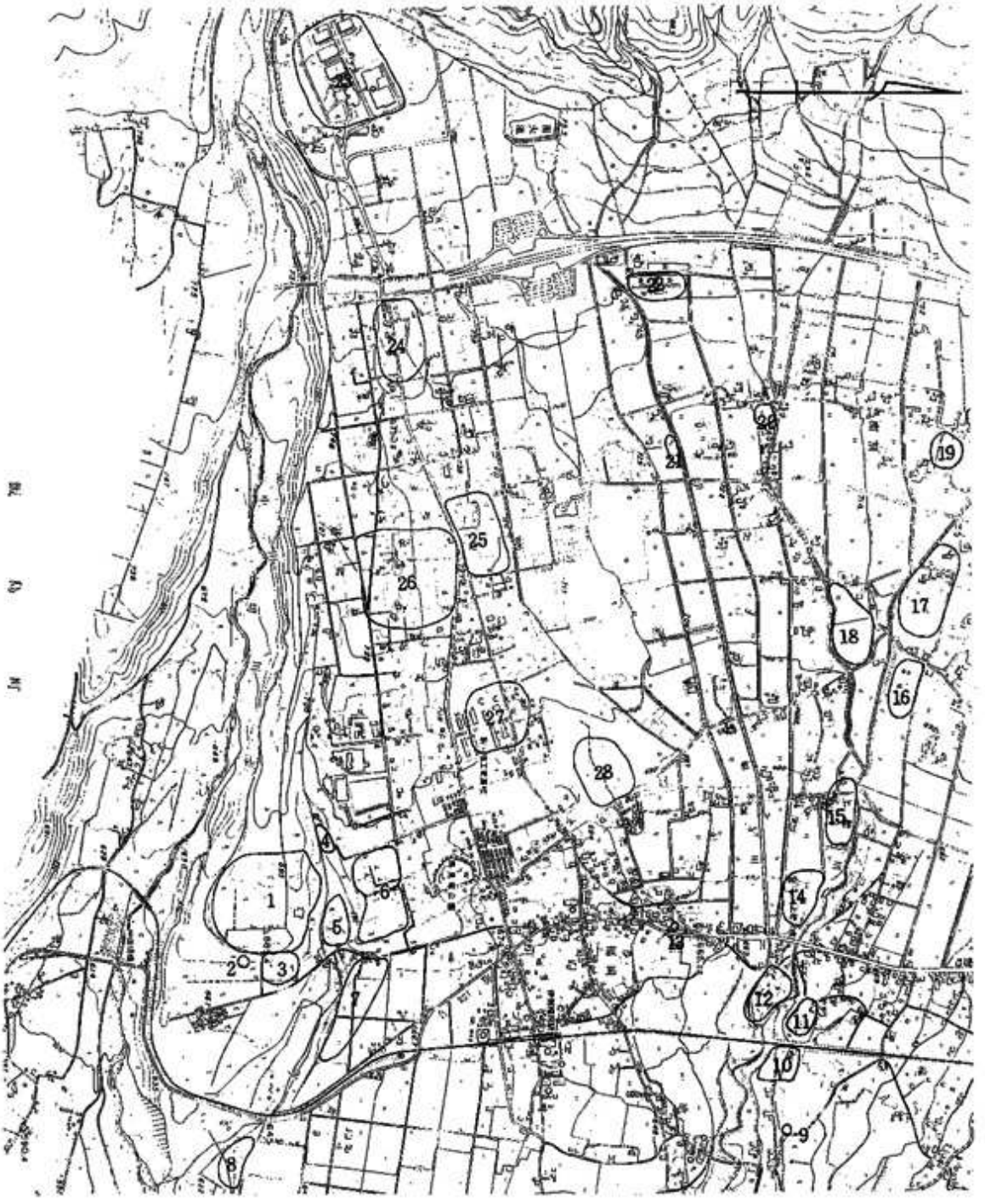
おわりに、１月という寒いまた雪の中を作業に従事していただいた皆さまに心からお礼を申し上げます。



第１図　辻沢南遺跡位置図（Ｓ＝１：200,000）

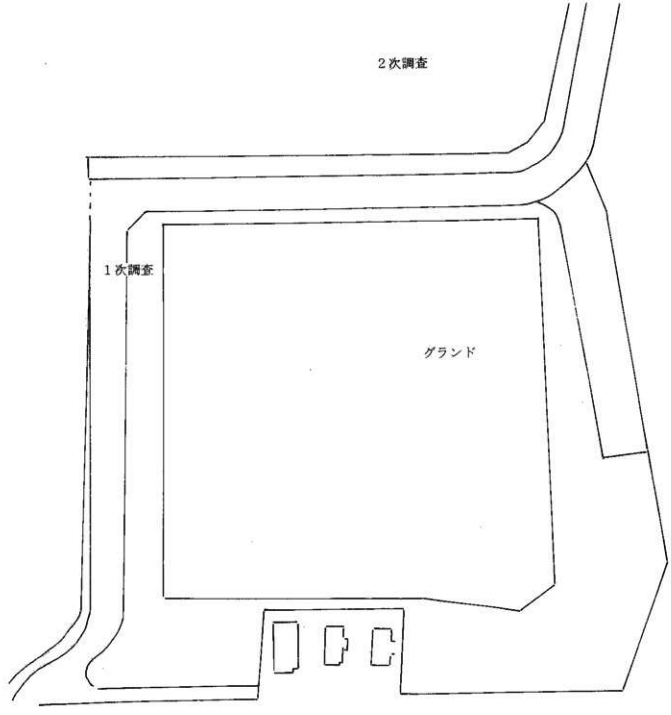


第2図　辻沢南遺跡地形図（S＝1：3,000）



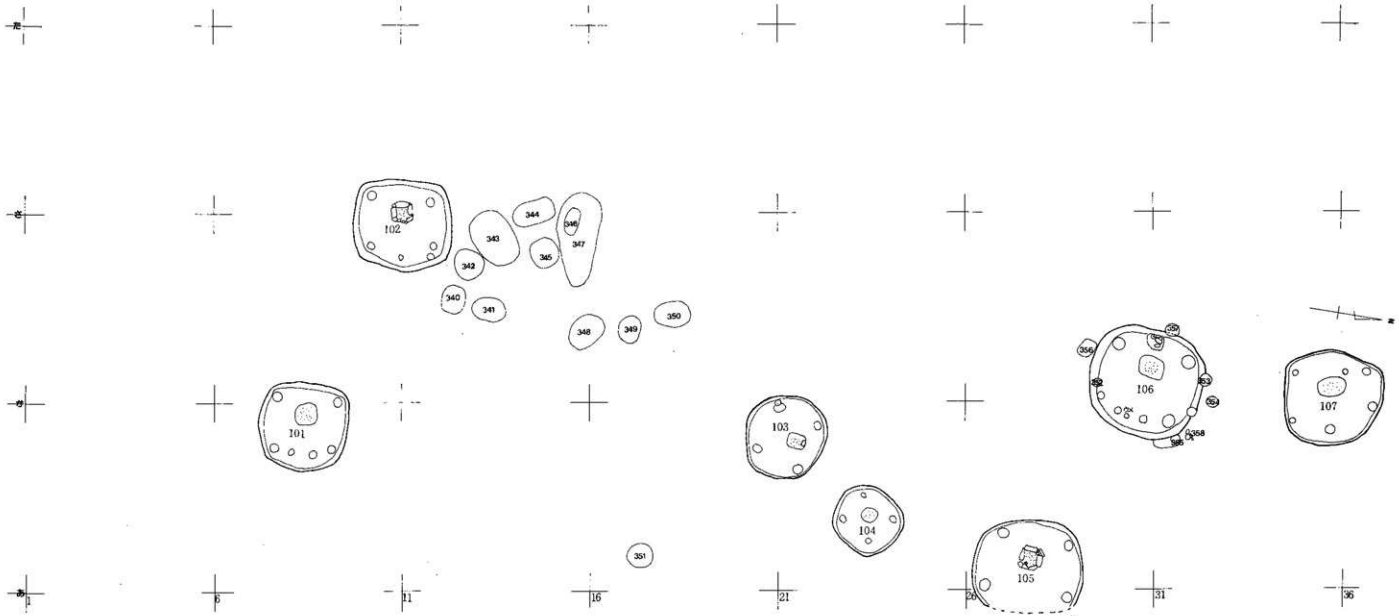
1．辻沢南　2．辻沢経塚　3．馬住の原　4．川頭　5．辻沢丸山　6．辻沢北　7．辻沢原　8．筒沢　9．丸塚　10．荒神沢　11．小町屋　12．如来寺　13．南酪経塚　14．舟山　15．羽場下　16．藤助畑　17．八幡原　18．大城林　19．北方　20．湯原　21．南原　22．横前新田　23．養命酒工場用地内遺跡　24．大徳原　25．大原北　26．大原南　27．駒ケ根工業高校　28．十二天

第３図　辻沢南遺跡と周辺の遺跡（Ｓ＝１：20,000）

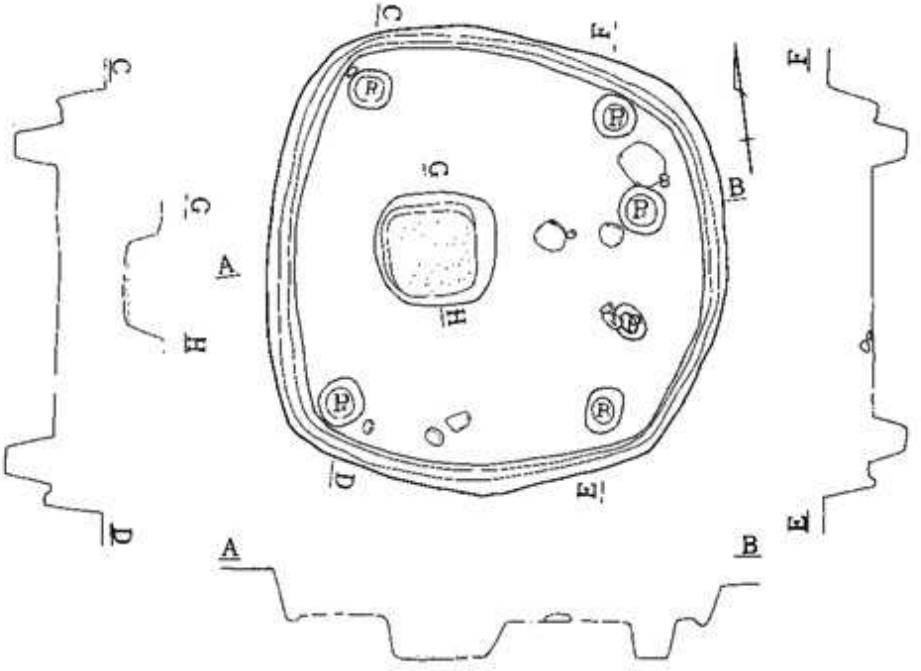

２次調査
１次調査
グランド

第４図　辻沢南遺跡遺構概略図（Ｓ＝１：1,000）

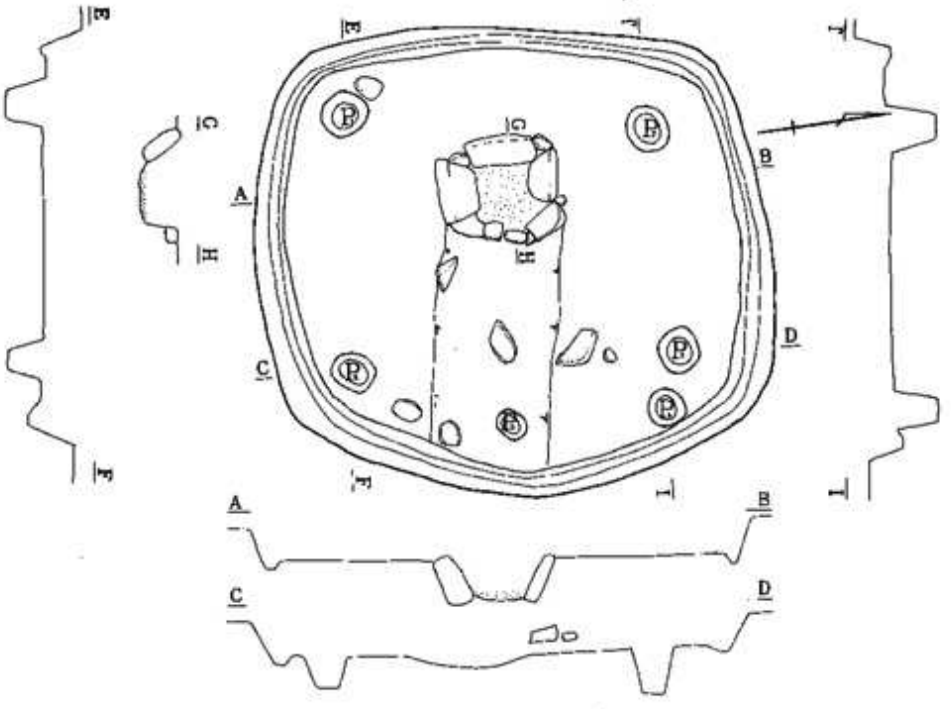
第４図　辻沢南遺跡遺構概略図（Ｓ＝１：1,000）



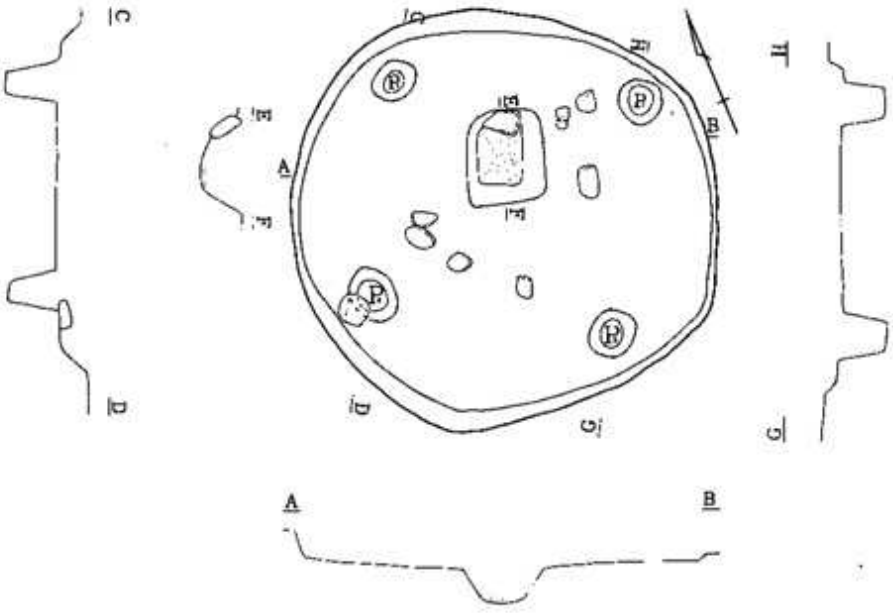
第５図　第２次調査遺構全測図（Ｓ＝１：200）



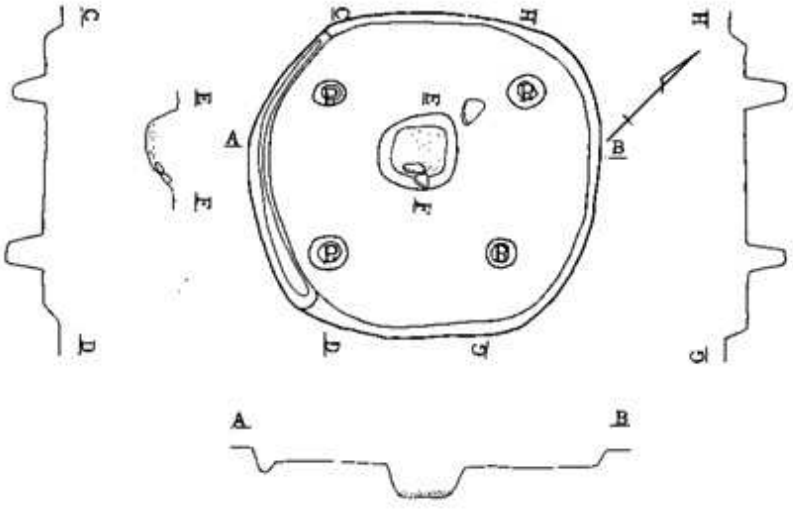
第６図　第101号住居址実測図（Ｓ＝１：80）



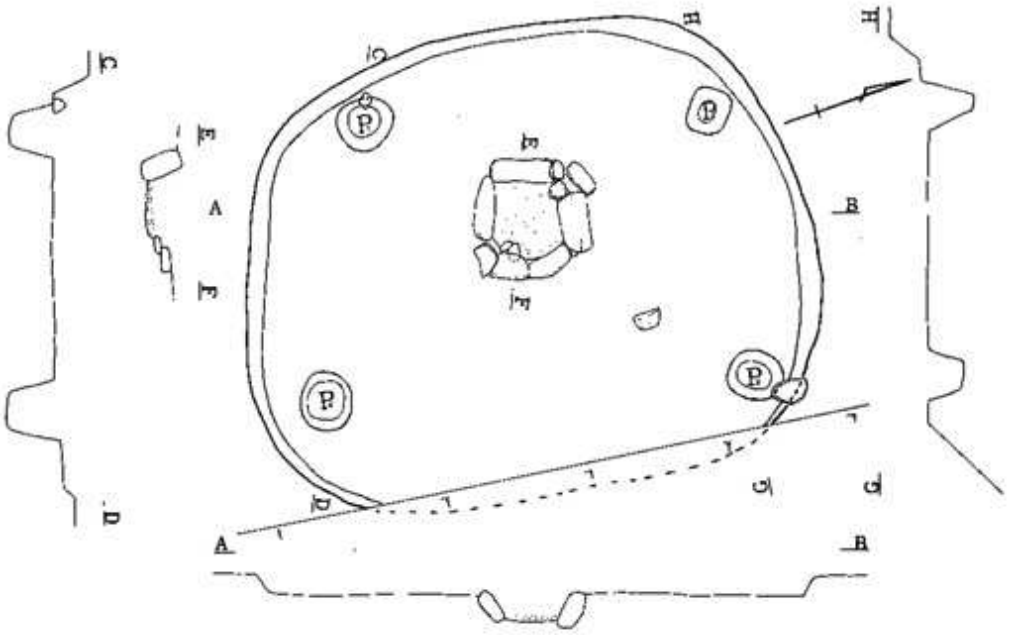
第７図　第102号住居址実測図（Ｓ＝１：80）



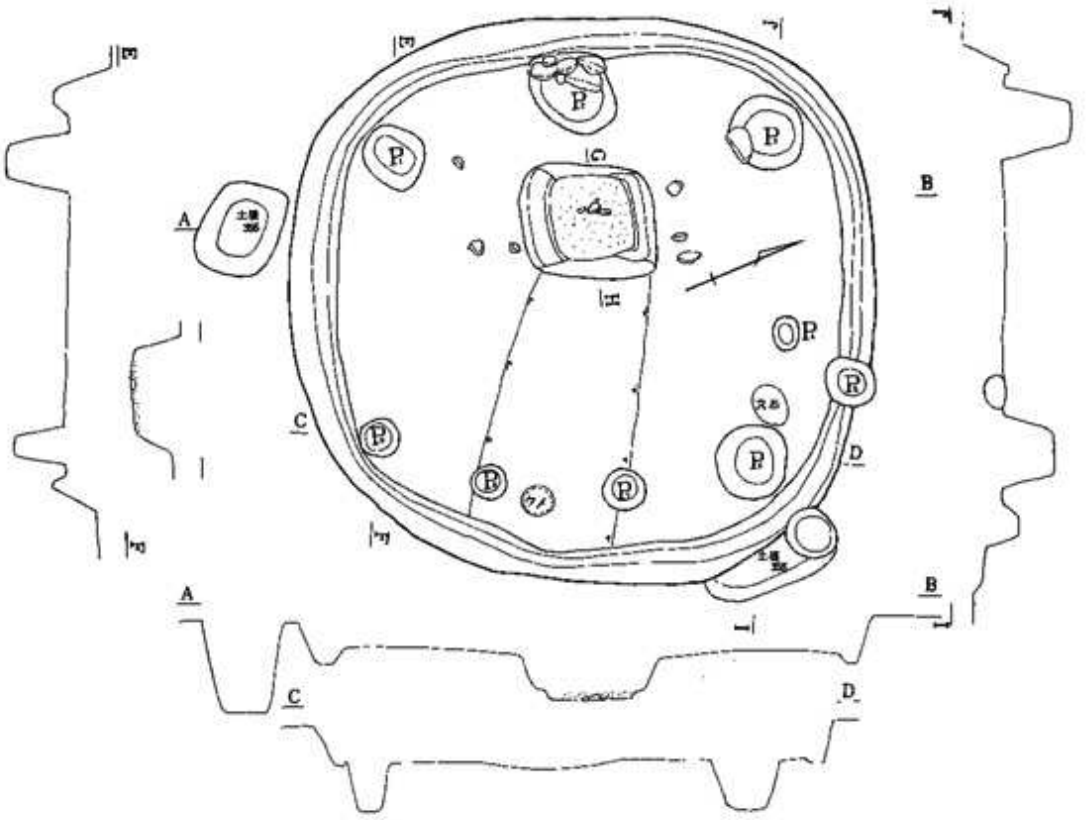
第８図　第103号住居址実測図（Ｓ＝１：80）



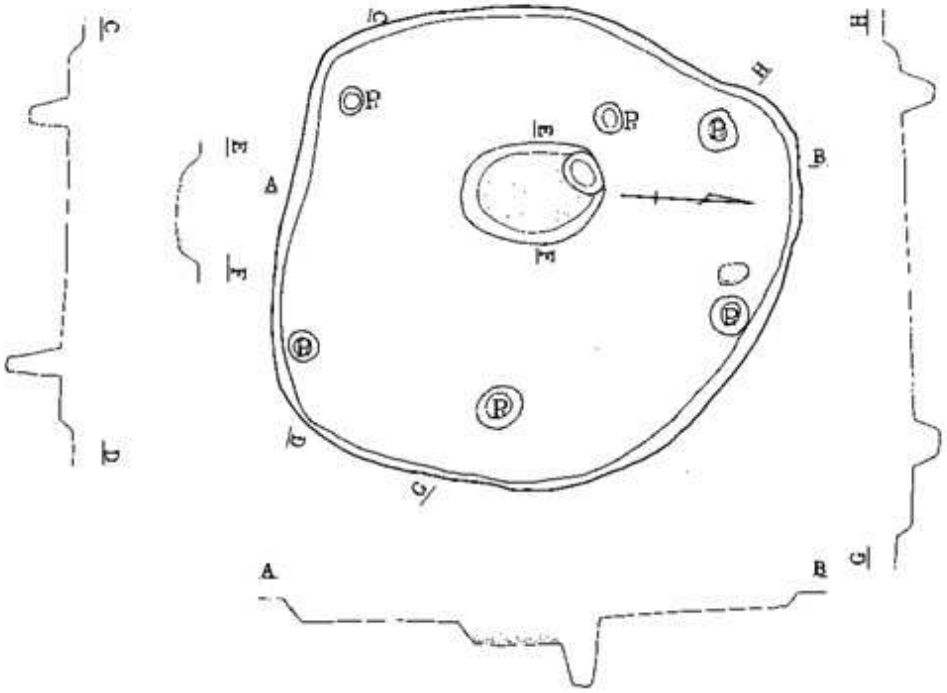
第９図　第104号住居址実測図（Ｓ＝１：80）



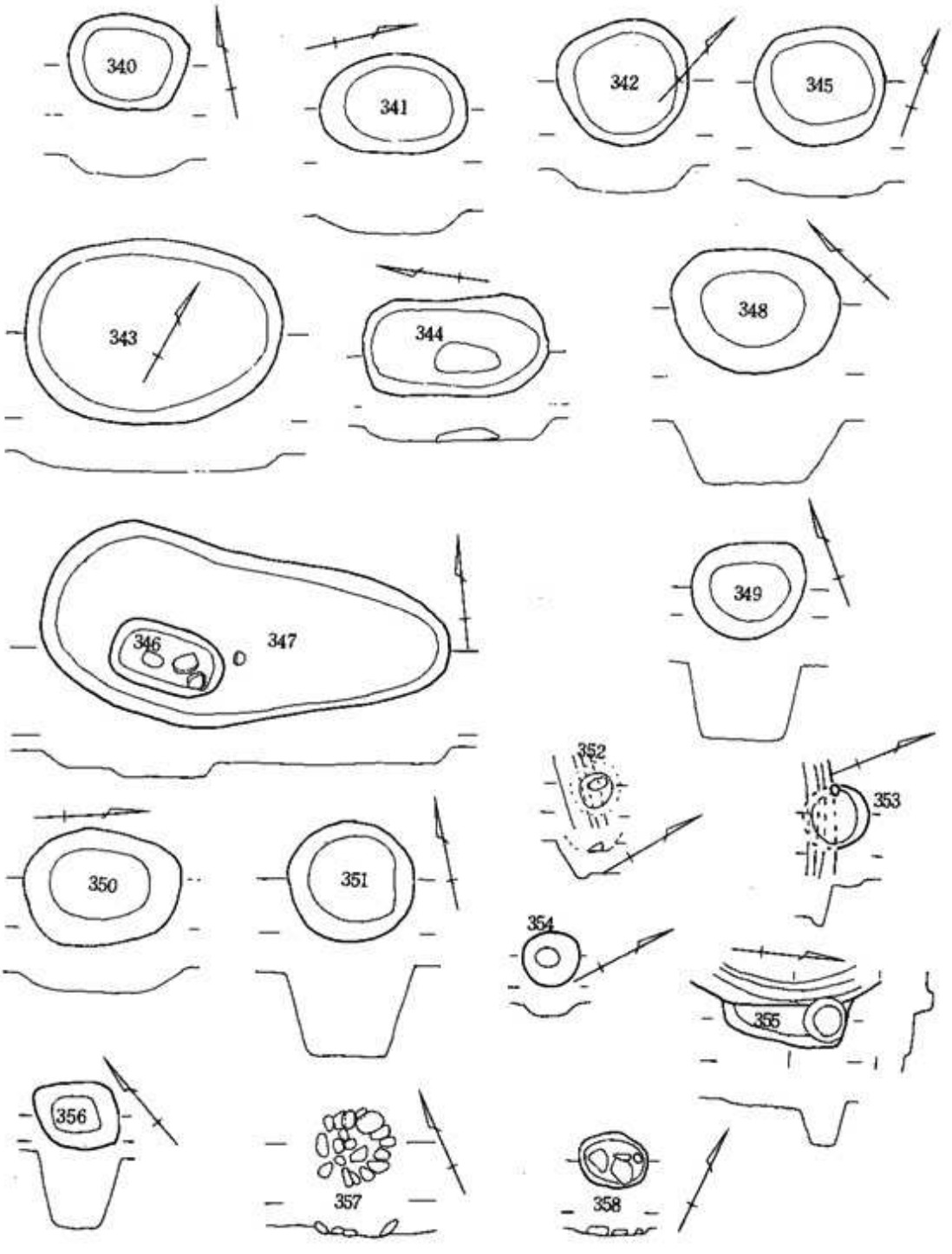
第10図　第105号住居址実測図（S＝1：80）



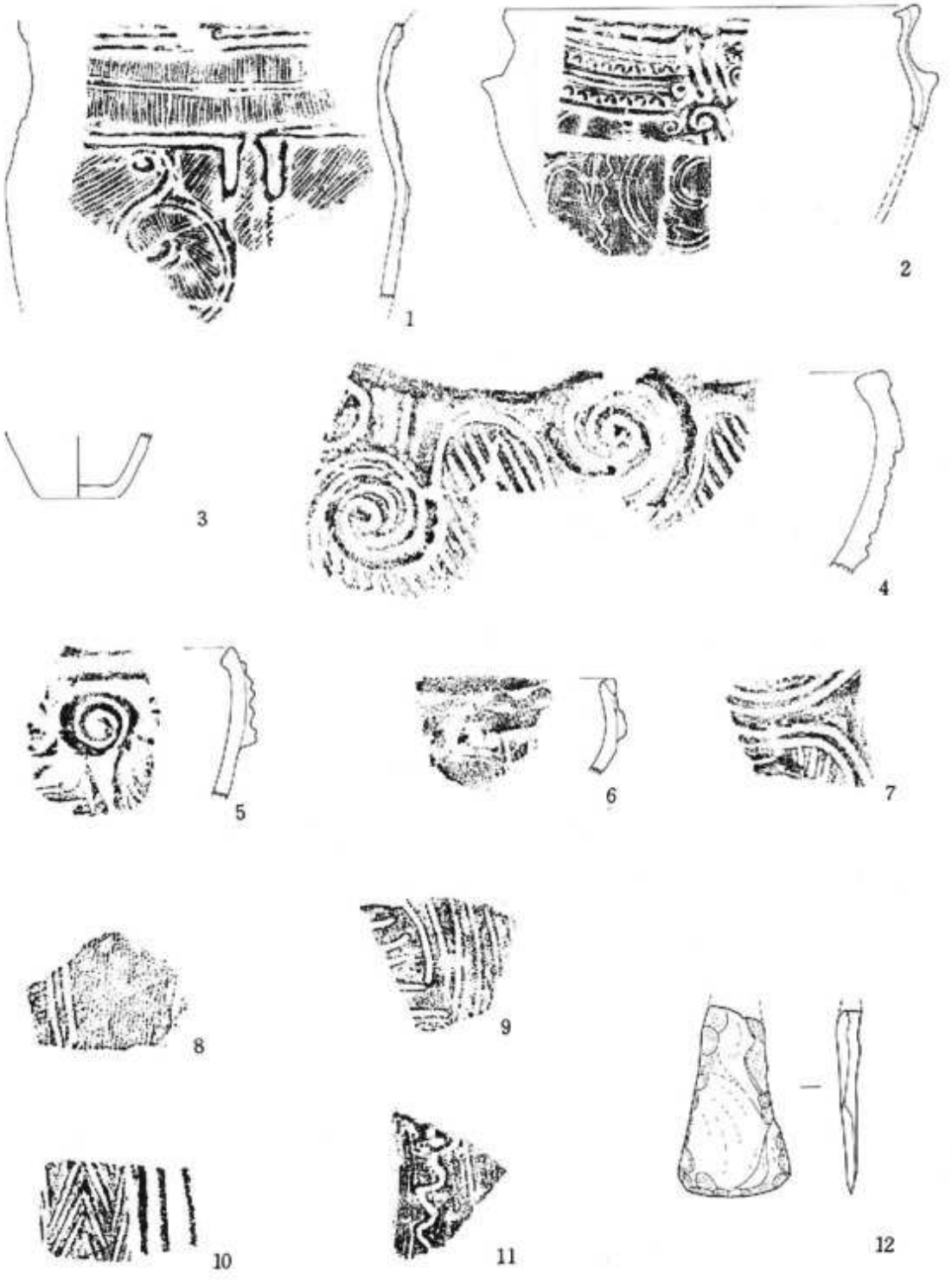
第11図　第106号住居址実測図（S＝1：80）



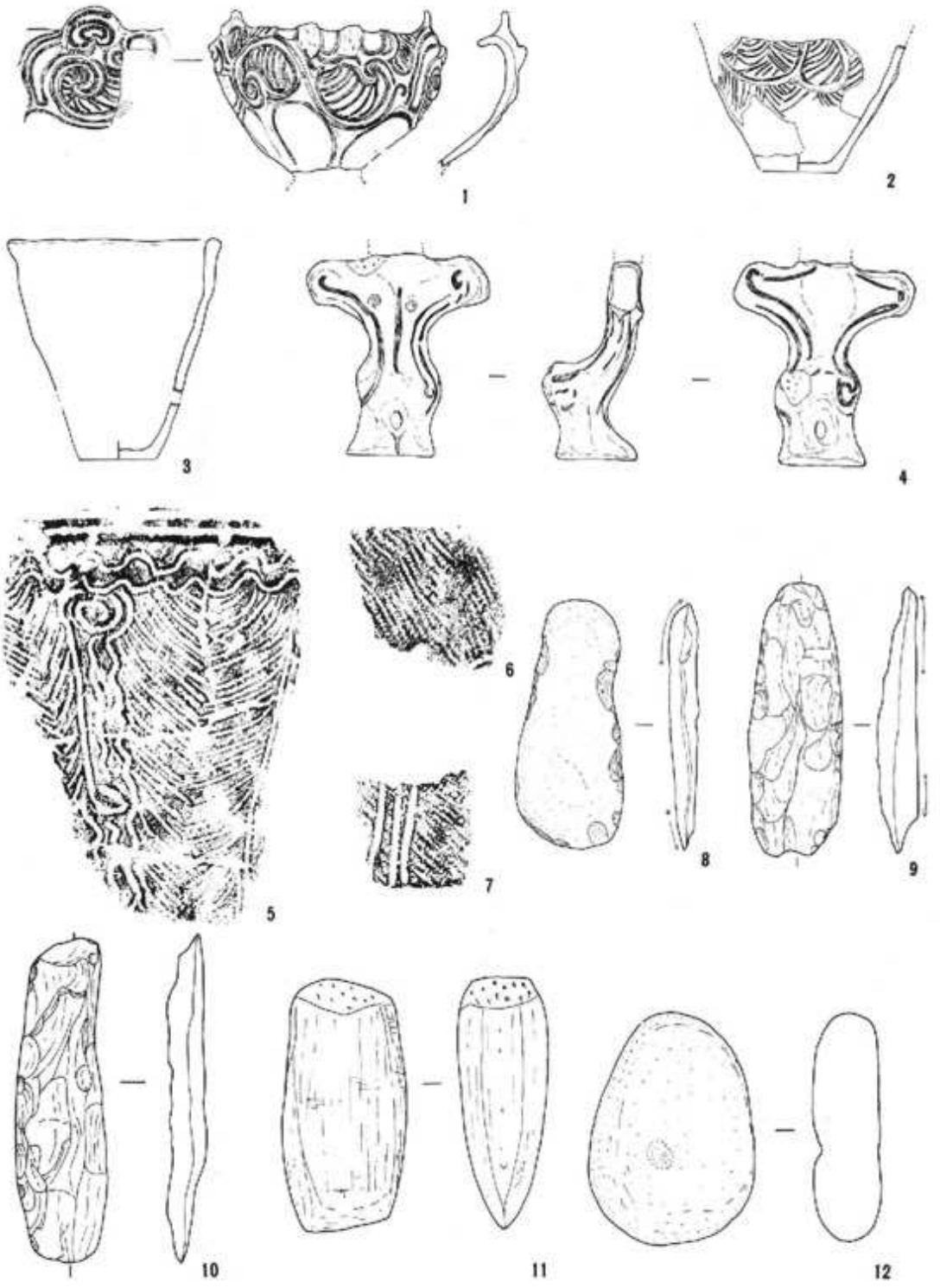
第12図　第107号住居址実測図（S＝1：80）



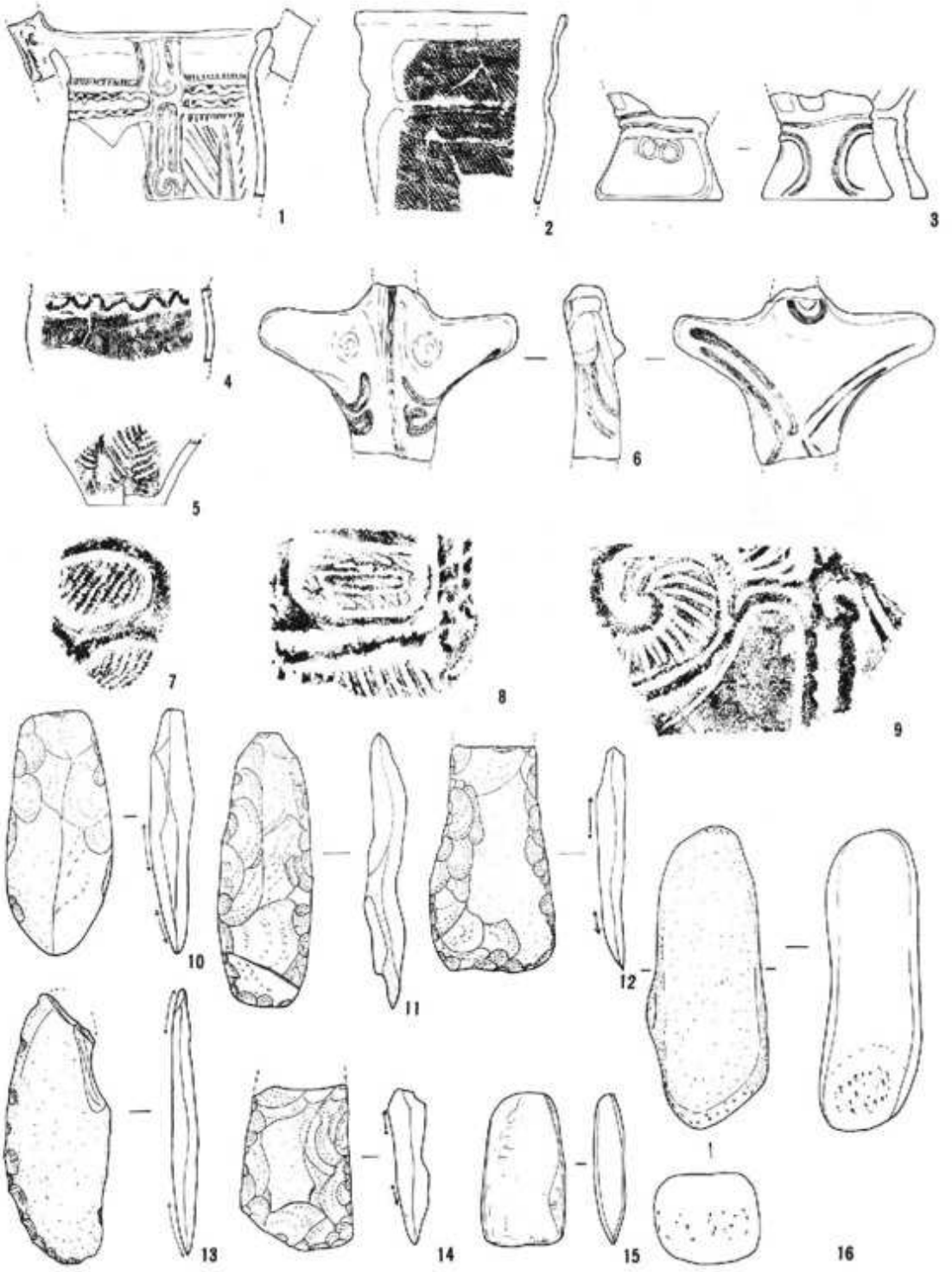
第13図　土壙実測図（S＝1：80）



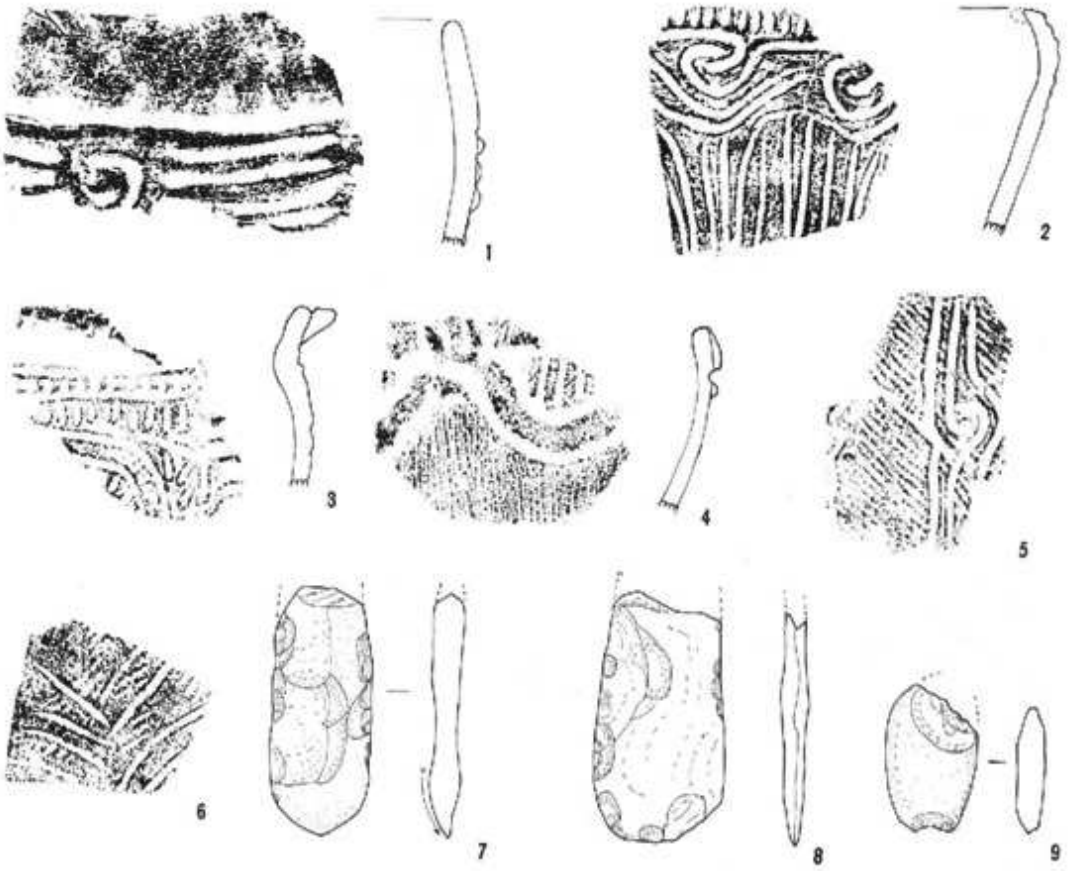
第14図　第101号住居址出土遺物（S＝1：3）



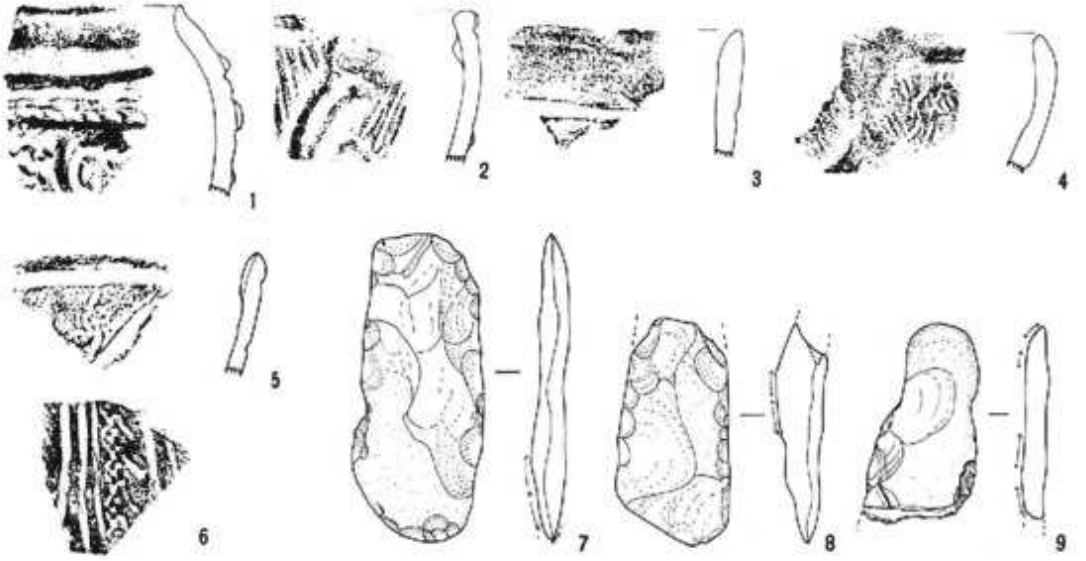
第15図　第102号住居址出土遺物（S＝1：3）



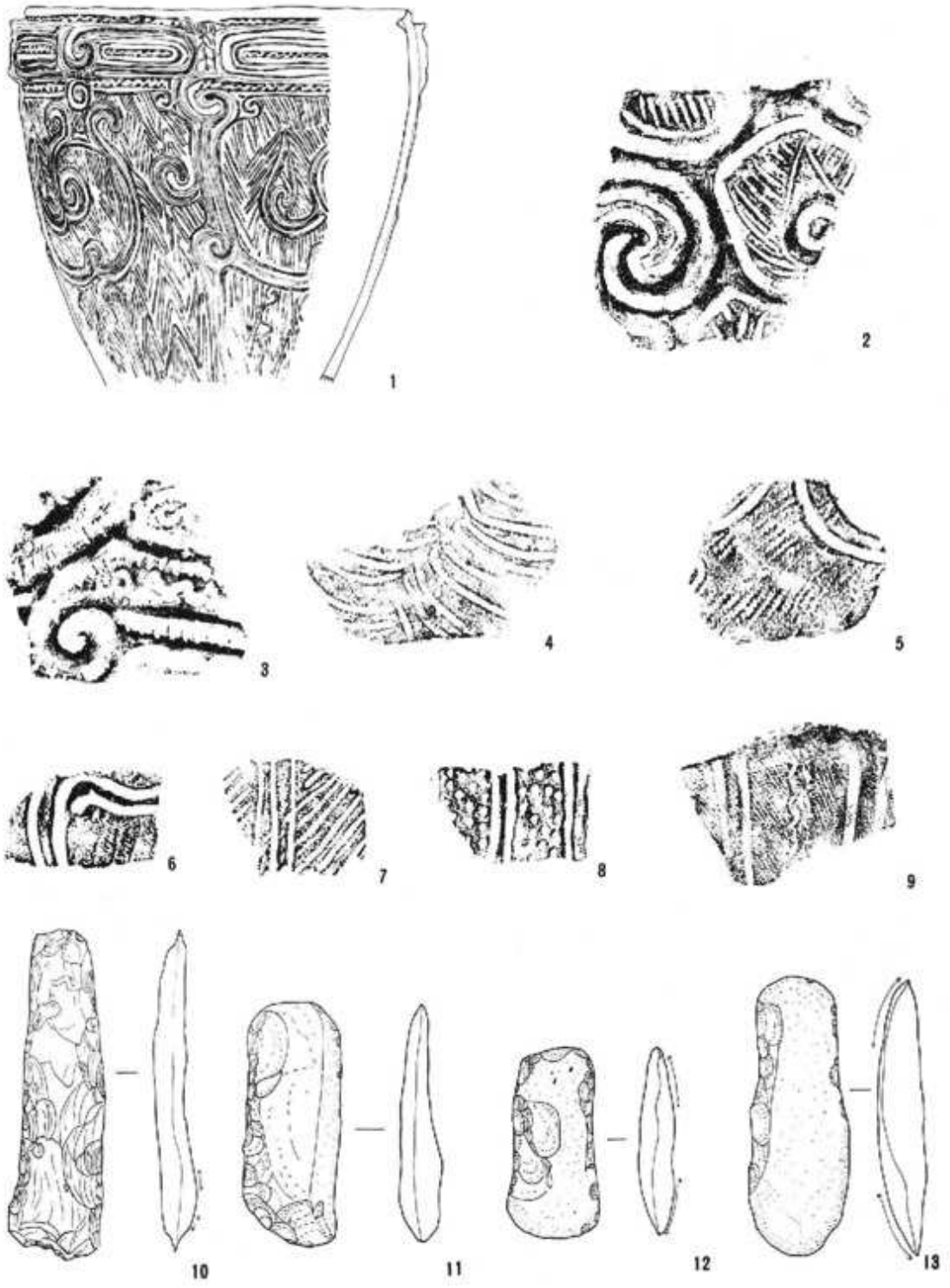
第16図　第103号住居址出土遺物（S＝1：3）



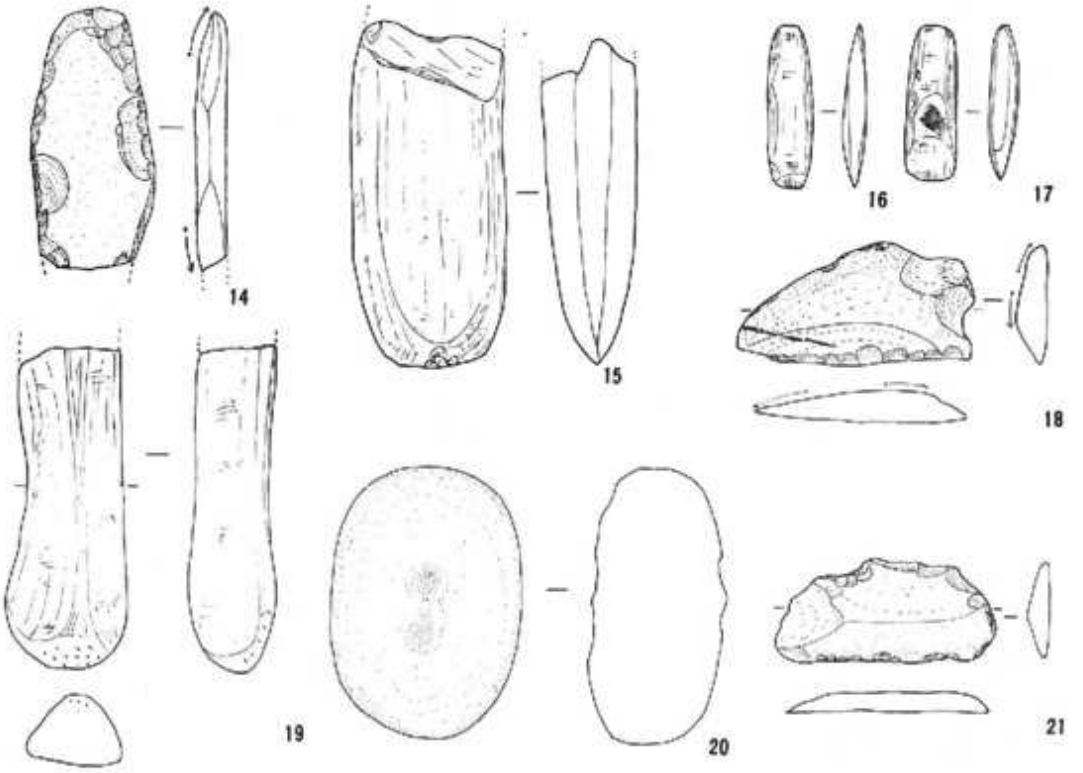
第17図　第104号住居址出土遺物（S＝1：3）



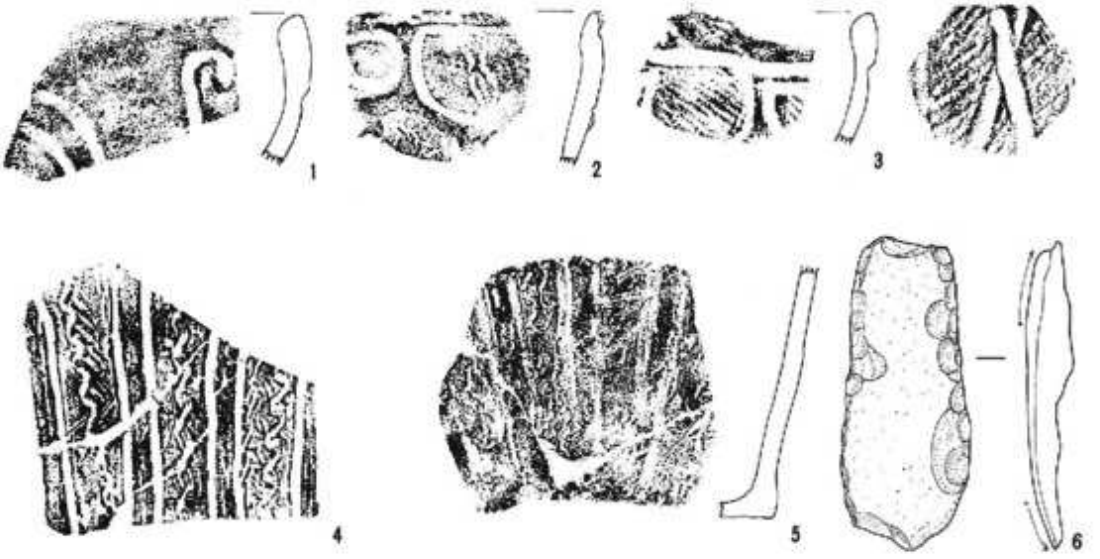
第18図　第105号住居址出土遺物（S＝1：3）



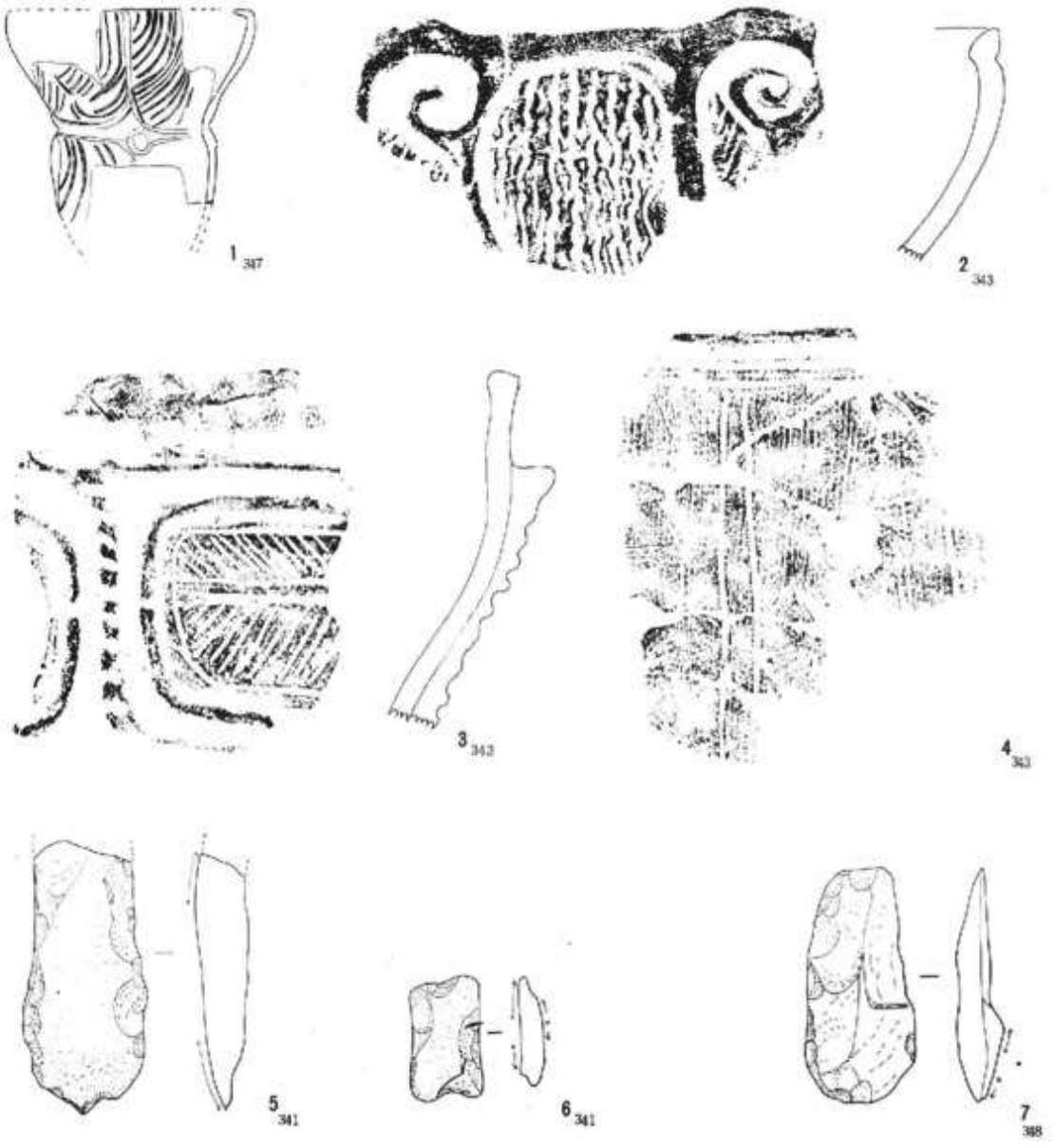
第19図　第106号住居址出土遺物（S＝1：3　11は覆土他は床面出土）



第20図　第106号住居址出土遺物（S＝1：3　19，20は覆土他は床面出土）



第21図　第107号住居址出土遺物（S＝1：3）



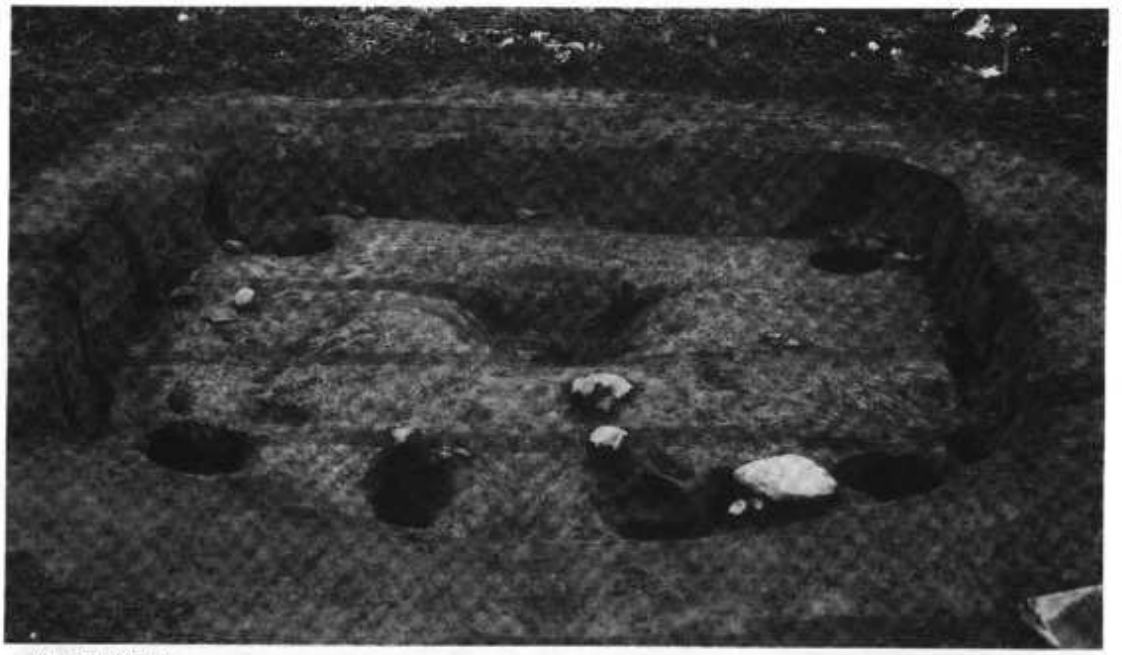
第22図　土壙出土遺物（小数字は土壙番号、S＝1：3）

図版１　遺跡遠景

南東より

南より

図版２　第１号・２号住居址



第１号住居址

第２号住居址

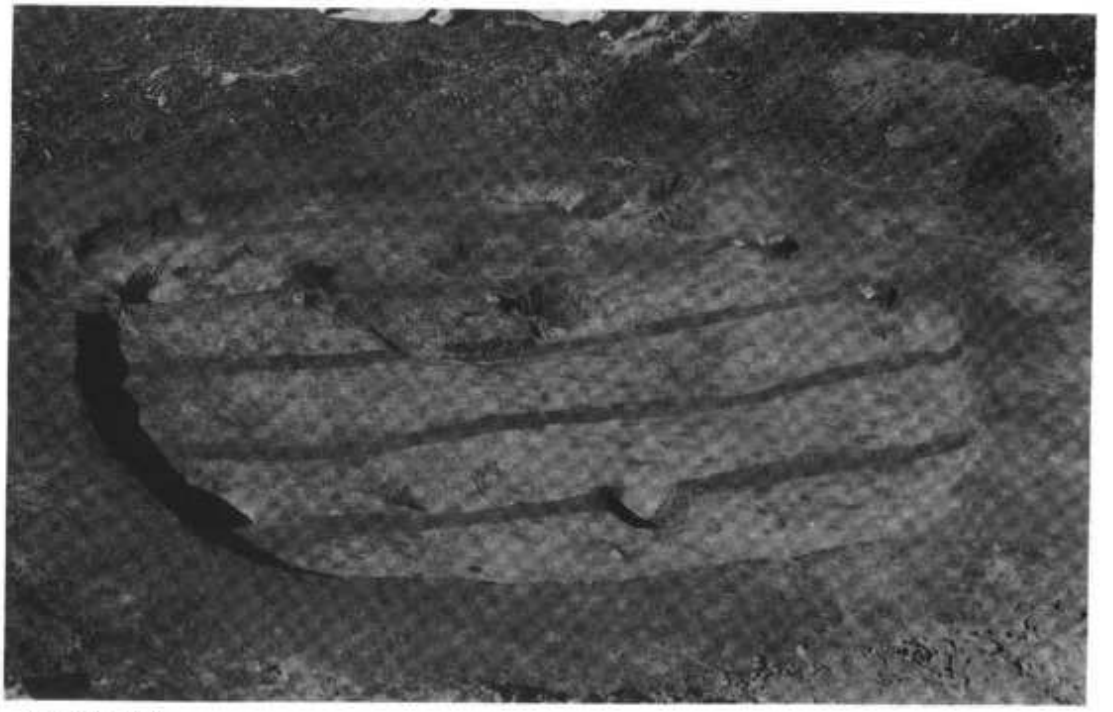
図版３　第３号・４号住居址

第３号住居址

第４号住居址

図版4　第5号・7号住居址

第5号住居址



第7号住居址

図版5　第6号住居址

埋甕

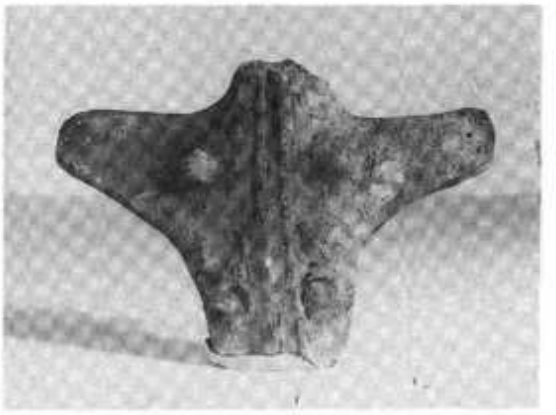
図版６　土器・土偶

６号住埋甕

２号住

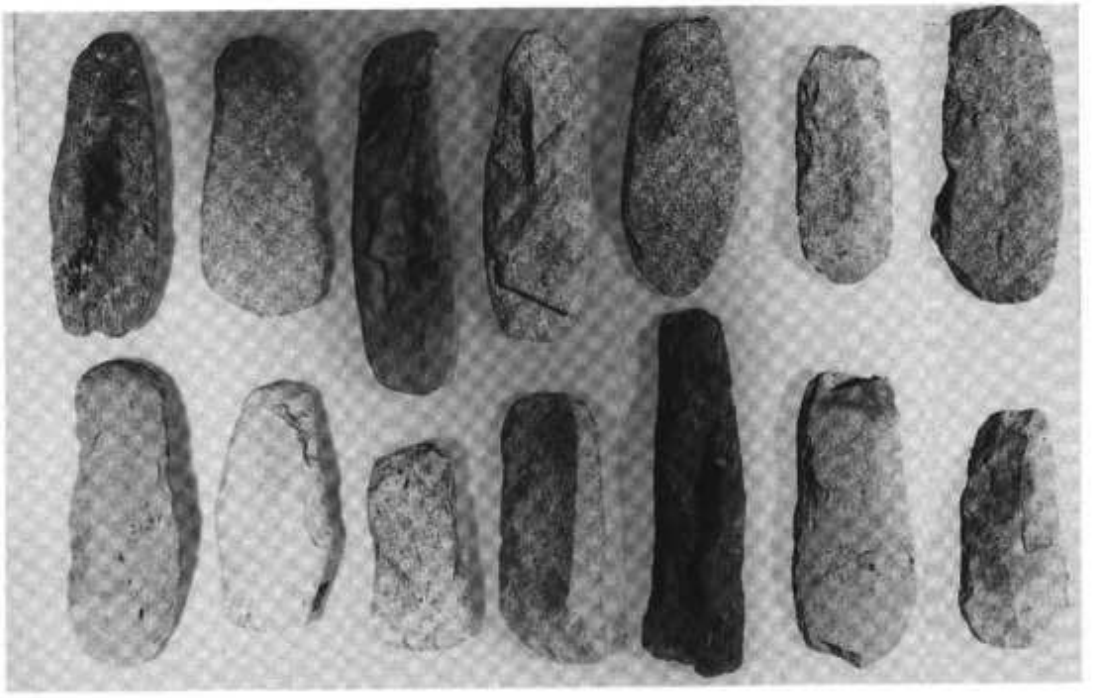
２号住

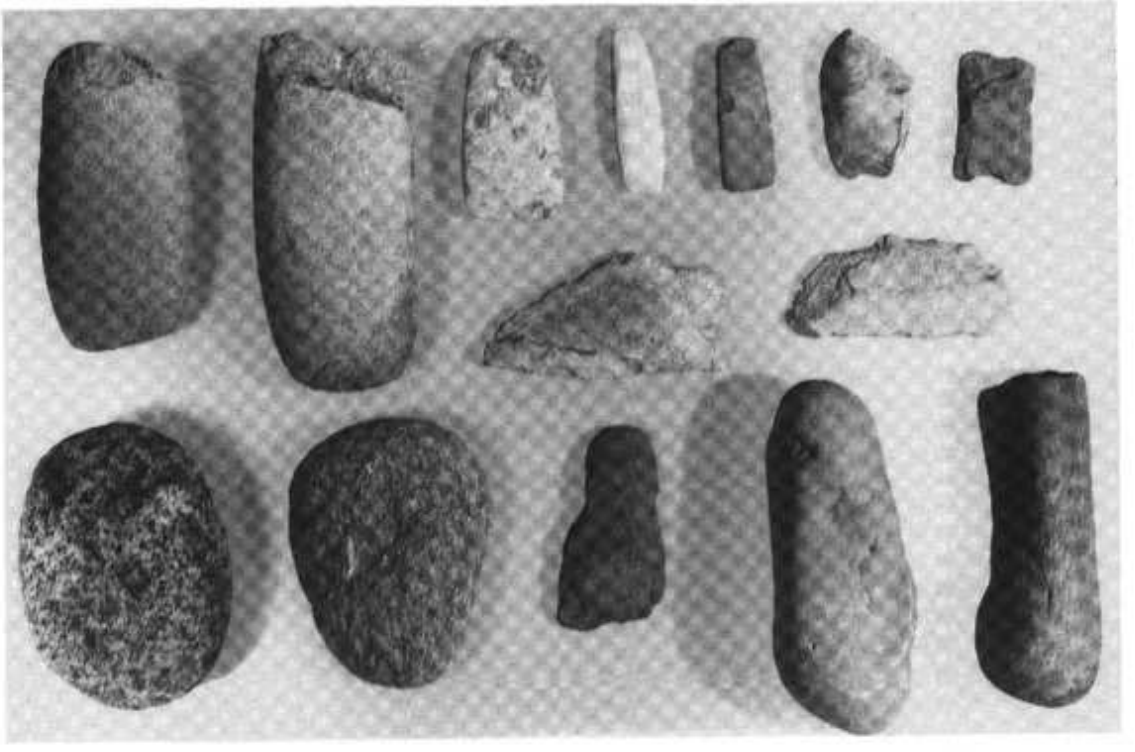
２号住



３号住

図版７　石器





辻 沢 南 遺 跡

（第２次調査）

――緊急発掘調査――

平成元年３月30日発行

編集　駒ヶ根市上穂栄町23番１号市立博物館内
　　辻沢南遺跡発掘調査団
発行　駒ヶ根市赤須町20番１号
　　駒ヶ根市教育委員会
印刷　伊那市美篶下川手
　　㈱小松総合印刷所